



豪雪と温暖化調査加速 弘大と防災科研連携協定

本県をはじめとする豪雪地帯の雪の降り方が、地球温暖化でどのように変わっているかなどを調べ、雪や氷に関わる防災に役立てようと、弘前大学と国立研究開発法人防災科学技術研究所（防災科研、本所茨城県）は、1日付で連携協定を結んだ。近年、各地で集中豪雪などが増えていることを背景に、雪や氷に関わる分野の研究・教育を加速させる。

協定を結んだのは、同大学の大学院理工学研究科と防災科研の雪氷防災研究部門。同部門は、新潟県長岡

協定を結んだ弘前大学と防災科学技術研究所の関係者。左から谷田貝教授、岡崎雅明研究科長、中村一樹部門長、石田祐宣准教授（同大提供）

（伊藤ほなみ）

市と山形県新庄市に拠点を持ち、岩木山の8合目にも観測機械を設置して積もった雪の重さの変化などを調べている。

両者は、これまでも津軽地方の雪雲の動きに関する研究や雪崩発生時の共同調査などで協力してきた。協定を結んだことで、よりスムーズに情報を共有した

り互いの施設を活用したりできるようになった。同研究科の谷田貝亜紀代教授（地球環境防災学科長）

は「次世代を育てることに思いを持った方々と一緒にやれることをうれしく思う。地域の防災について地域とともに研究し、有数の豪雪地帯である日本から世界に発信していきたい」と話した。

お詫びと訂正

谷田貝亜紀代教授の肩書に誤りがございました。関係者の皆様に深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

【誤】谷田貝亜紀代教授（地球環境防災学科長）

【正】谷田貝亜紀代教授（地球環境防災学科）

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]

弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp